

れき 民

# となん歴民だより vol.9

Morioka tonan folklore museum

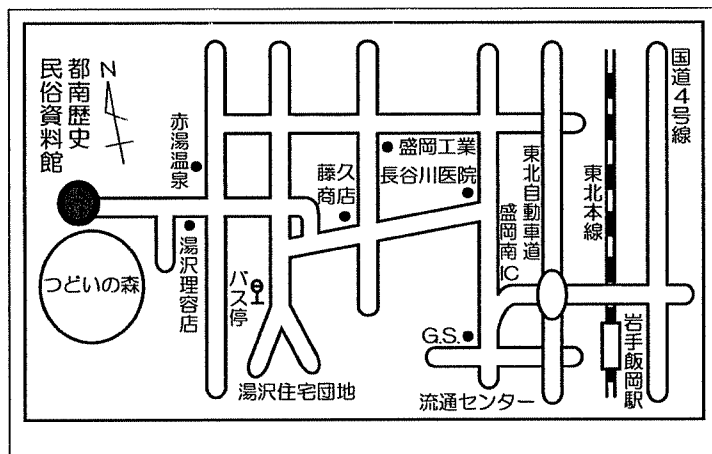
平成 18 年 12 月 23 日発行

発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 Tel.019-638-7228



研修会「史跡・文化財めぐり」の武田家住宅見学風景

## MAP ☆ACCESS



### — もくじ —

- ・ 大ヶ生金山跡
- ・ 所蔵資料から見たこと
- ・ 指定文化財紹介⑨
- ・ 行事報告
- ・ 民具・農具を貸し出します
- ・ 資料は語る⑨
- ・ となんの昔ばなし⑨

### ○利用案内

開館時間 午前9時から  
午後4時まで  
入館料 無料  
休館日 月曜日  
(休日に当たるときは、  
直近の平日)  
年末年始

おおがゆうきんざんあと  
—大ヶ生金山跡—

大ヶ生金山は都南地区の東部に位置する鉱山で、わが国の重要鉱山の一つに数えられていました。金山と言っても鉱石の種類は金銀銅であり、鉱区面積は昭和期において、約258万坪(約8,530km<sup>2</sup>)と記されています。この鉱山は、当時のお金で年産200万円以上の鉱業生産高があり、金の品位は10g/t平均でしたが、80g/tという高濃度のところもありました。鉱床は鉱脈延長1,700mにおよび、その幅は狭いところで1m、広いところで6mを超えるところがありました。

鉱業所で働く人たちは、職員30名前後、労務者約300名、臨時鉱夫を加えると400名を超えることもありました。職員住宅12、独身寮16、鉱山長屋80戸も建設されていました。また、乙部地区からの労務者も常時120~200名が専業あるいは副業として鉱山関係の仕事に従事していました。

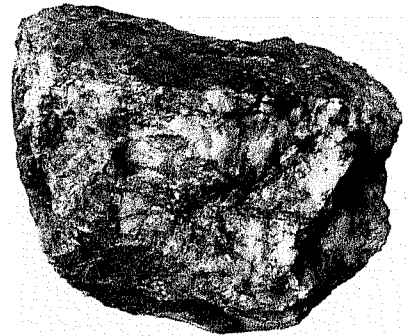
この鉱山の全盛時代は昭和10年~16年(1935~1941)ころまででした。金の最高生産額は同16年の約83kg、銀は同15年の約177kgであり、同17年には戦争のため休山、同19年には廃鉱となりました。

当資料館では大ヶ生金山産の金鉱石を展示しています。残念ながら金は見つかりませんが、透明な石英の隙間に青緑色の銅の化合物を観察することができます。

参考・引用資料／

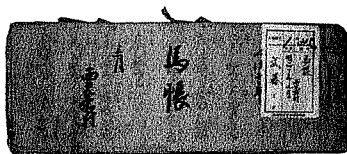
都南村誌編集委員会 「都南村誌」 1974

都南村教育委員会 「村の史跡めぐり一改訂版一」 1992

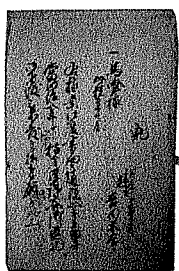


大ヶ生金山産の金鉱石

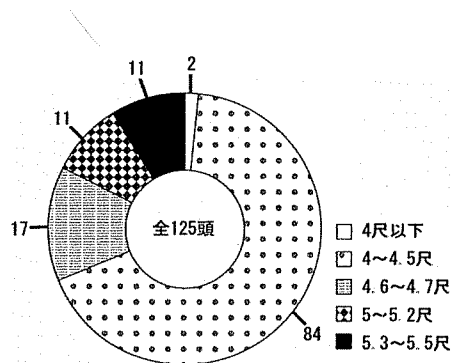
所蔵資料から見たこと —西見前村の馬飼育— 八木光則 (西部公民館)



馬帳

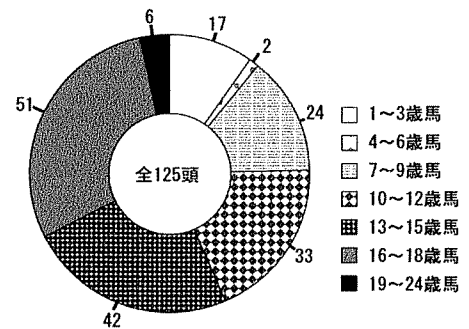


馬喰鑑札更新文書



◎馬の大きさ (馬尺)

馬尺 (前足から肩まで) が4.5尺 (1.36m) 以下の中形馬が7割を占めています。5尺 (1.5m) 以上は西洋種が導入されていたことを示しています。



◎馬の年齢 (馬齢)

10歳以上の馬が3/4を占め、高齢化が進んでいました。3歳馬の多くは5尺以上で、大形馬を新たに生産する動きもみられます。

西見前村は盛岡市の南部にあり、近郊農村として馬の飼育がさかんでした。明治10年(1877)の『馬帳』によれば、村内131戸のうち125頭の馬が飼育されており、ほとんどの家で馬が飼われていたことがわかります。

『馬帳』には、馬尺 (馬の大きさ、4尺を規準に寸で表示)・毛の色・雌雄・馬齢・所有者戸番・氏名が記載され、どのような馬が飼育されていたかがわかる好資料です。若い馬に大きい馬尺が多く、西洋種が導入されつつありました。

『馬喰鑑札更新文書』には、馬匹の売買には1円の「馬喰稼税」という免許税を払って鑑札を受ける必要があった事が記され、西見前村では何人も鑑札を受けています。

西見前村は、馬に関わりの深い村であったことが、これらの文書からよくわかります。

盛岡市所在指定文化財紹介 ⑨



盛岡市指定文化財

せきそうじゅうろくらかん 石造十六羅漢  
ごちによらい 付 五智如来

昭和54年(1979)

8月1日指定

盛岡市

江戸時代の盛岡藩の4大飢饉といわれる元禄・宝暦・天明・天保の大凶作によって、領内には多くの餓死者がでました。祇陀(ぎだ)寺14世天然和尚は、その悲惨な餓死者を供養するために、十六羅漢・五智如来の合計21体の石仏建立を発願しました。

そして領内から浄財の喜捨を募って、天保8年(1837)工事に着手しました。下絵は藩の御絵師狩野林泉が描き、石材は市内の飯岡山から切り出し、藩の御用職人の石工7人が3年かかって荒刻みを行い、北上川を舟で渡して、建設場所の祇陀寺末寺の宗龍寺境内に運び入れ、最後の仕上げをしたと伝えられています。こうして起工から13年目の嘉永2年(1849)に、発願した天然和尚の孫弟子にあたる長松寺13世泰恩和尚のときに、ようやく竣工をみるに至りました。しかし、宗龍寺は、明治維新後に廃寺となり、明治17年(1884)に盛岡の大火で寺院も焼失し、現在は21体の石仏群を残すのみです。

引用資料/

盛岡市教育委員会「盛岡の文化財」1997

行事報告(9月29日)

史跡・文化財めぐり「歴史の街道散歩」

～稲荷街道～

今年度の第二回目の史跡・文化財めぐりは、盛岡市から紫波町の稲荷神社に至る稲荷街道で行われました。絶好の日和に恵まれ、その内容の一部はテレビ都南で10月4日に放映されました。



昔の暮らしを見つめてみよう

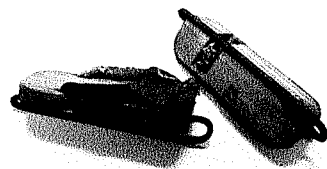
—学校や地域活動団体などへ—

農具・民具を貸出します!

当資料館の、数多くの民俗資料を学校や子ども会、地域活動などの場に広く役立てていただくために、所蔵資料の一部を貸出しします。

長い年月のあいだ使い込まれてきた資料一つ一つにはその家々の暮らしぶりや手づくりの道具に対する使い手の愛着が見え、手にとってはじめて知ることがとてもたくさんあるものです。

資料の借受を希望する場合は、当館にご連絡下さい。



資料が身近になると

いろいろなことがみえてくる

「農具・民具を貸出します!」

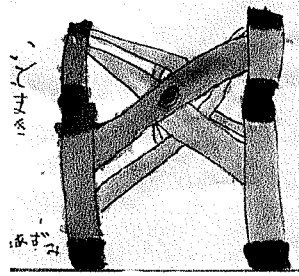
を利用して

盛岡市の山王児童センターの図エクラブでは、このほど都南歴民の民具をお借りして写生をしました。電気のない時代のアイロンやカンテラは、子ども達にはとっても不思議!また、糸巻きを見ながら糸から布が出来るまでを聞いて、昔の暮らしを想像しながら楽しく描きました。

図エクラブ講師  
飯坂真紀さん

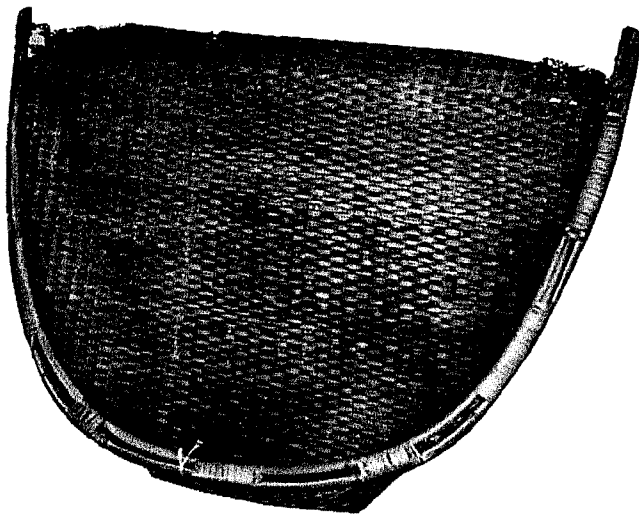


炭火アイロン

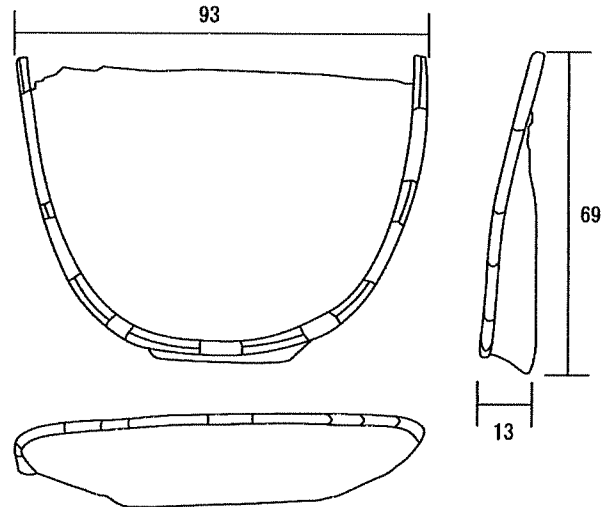


糸巻き

児童の作品の一部



箕



法量 (cm)

箕は米などを選別する道具で、一方が開いた形をしていて、細い割り竹と、藤、桜、イタヤなどの木の皮を細く切ったものを使って編み上げられています。

稲の収穫以降、脱穀したばかりのモミには、わらくずや実の入っていない空モミなどが混じっています。それらを分けて取り除く作業にはさまざまな選別用具が用いられます。これらの道具には粒径選と比重選という二種類の選別方法があります。粒径選とは網目の大小により穀粒を選別する方法で、篩（ふるい）や万石（まんごく）と呼ばれる道具がそれにあたります。比重選とは風に穀物を浮かせて、その落下速度の違いを利用する方法で、今回採り上げた箕はこの比重選に属します。箕は農家にはかならず三つ、四つあって、少量のモミを入れ、開いた口を向こう側にして上下にふるることにより、モミといっしょに混じっているわらくずなどを取り除くことができます。また、穀物を運んだり干したりするのにも重宝しました。

箕は日本人にとって大切な主食である米を入れるものなので、神様への供え物を載せる器としてよく使われてきました。今も、正月のお供え餅や十五夜の月見団子を箕に載せて供える風習があります。また、箕は靈魂をすくうもの、靈魂の入れ物とも考えられていました。そのため、人が亡くなろうとするとき、その息子が屋根に上がってその人の名を呼び、箕ですくう格好をすると、魂が戻ってくるという伝承もあります。

箕の機能を機械化、大型化したものが唐箕（とうみ）で、江戸時代に中国から伝わってきました。唐箕は胴体の中に取り付けられた板をハンドルで回転させ、その風力によってロウト状の口から入れた穀物を選別します。

引用資料／ 田原虎次「稲作における農機具の変遷」 農林水産技術会議事務局 1990

「日本の生活道具百科4 働く道具」 河出書房新社 1998

## となんの昔ばなし<sup>おかし</sup> ⑨ 『送り狼(おくりおおかみ)』

先祖は医者稼業をし、それが明治の初年までの三代続いた三本柳の古い家に伝わる話です。

源吉という人が医者をしていた頃、まだ明治以前のことで、手代森に往診(おうしん)に行ったとき新道峠(しんみちとうげ)の盛岡養護学校付近の山道にさしかかると大きな一匹の狼(おおかみ)が喉(のど)に骨をひっかけたらしく、口を大きくあけて首をあげたりきげたりして苦しんでいました。源吉は狼に近づいて、「おい狼、俺に危害を加えなければ助けてやるがどうだ。」という狼は眼に涙をためて見あげました。源吉は、背負っていた薬箱を道におろして、狼の喉に手を入れて、ひっかかっていた骨をとってあげました。狼は首をあげて、源吉の顔を見ていたが、しばらくすると静かに歩いて山中に入って行っていきました。

それからのことです。源吉が手代森や黒川に往診に行くとその帰り道、どこからともなくその狼が現われて、後に着いてくるのです。北上川の渡場までくると前脚をたてて座ったようにして帰ろうともしませんでした。「もうよいよい、お前は山へ帰れ。」というので、ようやくそばをはなれて、帰っていくのでした。(終)

出典『となんの民話』

(都南歴史民俗資料館刊)